

『高僧伝』の注釈的研究

平井俊榮

(一) 高僧伝について

梁、慧皎（497-554）の撰になる『高僧伝』¹⁾は、中国への仏教初伝とされる後漢の永平10年（67）から梁の天監18年²⁾（519）にいたるまでの453年間に活躍した高僧の事蹟を記録したもので、本伝立伝者257人、傍出附見者243人の伝記が収められている。本書は著録された僧侶の活躍年代からも明らかなように、初期の中国仏教研究には必要不可欠な基本的史料であり、実際、本書は仏教史研究者はいうに及ばず、教理研究者からも幅広く利用され、多くの研究者を裨益してきた。

本書は全部で14巻よりなるが、最後の第14巻は慧皎自身の自序³⁾と前13巻の総目録、それに王曼頴と釈君白（慧皎の号）の二首の往復書簡よりなるから、実質的な伝記部分は13巻である。慧皎はこれを訳経、義解、神異、習禪、明律、亡身、誦経、興福、経師、唱導の十科に分けて立伝しているが、いま本書の構成に従ってこれを示してみると以下の如くである。

巻1～巻3…訳経—35人

巻4～巻8…義解—101人

巻9～巻10…神異—20人

巻11…習禪—21人

明律—13人

巻12…亡身—11人

誦経—21人

巻13…興福—14人

経師—11人

唱導—10人

(但し、上記の数字は本伝立伝者のみであって、いわゆる傍出附見者は含まれていない)

さて、本書執筆の動機について、慧皎はその自序で、従来の僧伝は褒賛に過ぎたり、事実の記載に乏しかったり、あるいは繁雑であったりして適当なものがなかったことを指摘し、さらに「高僧伝」⁴⁾と称する理由について次のようにいっている。

前代より撰する所、多くは名僧と曰う。然るに名は本と実の實なり⁵⁾。若し実行するも光を潜むれば、則ち高くして名あらず。(中略)名ありて高からざれば、本と紀する所にあらず。高くして名あざれば、則ち今録に備う。

(大正蔵50・419a)

すなわち、これは従来の僧伝が「名僧」と呼ばれる人びとを中心に著録されていたのに対し、慧皎自身はたとえ名声があっても徳が少なければこれを記さず、逆に無名のものであっても高德のものは積極的に著録することを明言したものである。このような慧皎の姿勢には、多分に本書に先行する宝唱(生没年不詳)の『名僧伝』に対する意識があったことは想像に難くないが、ここに慧皎の本書執筆の動機と撰述の方針を明らかに認めることができるであろう。このように慧皎は主として宝唱の『名僧伝』を意識し、その欠を補うべく本書を執筆したものと思われるが、そうした反面、本書は『名僧伝』の影響を色濃く受けて成立したものであったことも学者によってつとに指摘されている事実である⁶⁾。

慧皎はやはり自序の中で、本書執筆に際して披覧した諸史料について述懐しているが、そこにあげられた史料は僧祐(445-518)の『出三蔵記集』をはじめ18種⁷⁾の多岐にわたっている。さらに王曼穎の後記には、『道人単道開伝』(1巻、康泓撰)、『高座別伝』(王秀撰)、『名僧伝』(31巻、宝唱撰)などの史料も記されているところから、慧皎の手元にはおそらくこのような史料が備えられていたのであろう。しかし、ここで注意しておくべきことは、慧皎も王曼穎も一言もこれらの史料に依拠したとはいっていないという事実である。残念ながらこれらの史料のほとんどは今日に伝わらないものばかりで、実際、慧皎がこれらをどの程度参考にしたのかを確かめるすべはないのである。ここで大胆な推測が許されるならば、これらのほとんどは従来の伝記史料が不備であったことを強調するために列挙されたものにすぎず、慧皎がこれらすべてに依拠した事実はむしろ少ないと見

る方があるいは真相に近いのかもしれない。それはともかくとして、ここには我々が本書の成立を考えるにあたって等閑に付すことのできない二つの重要な史料が含まれている。すなわち、『出三蔵記集』と前にもふれた『名僧伝』がそれである。

周知のように、本書に先行する『出三蔵記集』は後漢から梁にいたるまでの訳経の状を記録した経録であるが、同書には経序や経の後記のほかには訳経僧32人の伝記3巻も含まれ、訳経一科の専伝としても注目されるものである。これを本書に記される訳経僧の伝記と比較してみると少なからず対応関係にあることがわかる。したがって、本書「訳経」はほとんど同時代に著された『出三蔵記集』のそれを参考にしていることは明らかであり、『出三蔵記集』が本書撰述の重要な指針となっていたことが推知されるのである。

宝唱の『名僧伝』は不幸にして今日に伝わらないが、我が国、鎌倉時代の東大寺の学僧宗性(1202-?)の抄出した『名僧伝抄』に付された目録によって、その輪廓を窺い知ることができる。それによれば、『名僧伝』の伝記部分は30巻、425人の伝記からなる。ところすでに見たように本書は実質的には13巻、本伝257人、傍出附見者243人よりなるから、『名僧伝』は本書に比して巻数において大部なものであったことがわかる。但し、これは単純に巻数を比較しただけであって、『名僧伝』の実際の分量が果たしていかほどのものであったのかはやはり想像の域を出ないのである。ところで、こうした『名僧伝』と本書の関係について詳細な検討を加えられた牧田諦亮博士によれば⁸⁾、本書本伝の257人で『名僧伝』に名の見えない者は30余名に過ぎず、本書の十科の分科も『名僧伝』の影響を少なからず受けていることが明らかであるという。詳しくはすべて牧田論文に譲るが、ここに明らかに『名僧伝』の本書に対する顕著な影響を認めることができるのである。したがって、すでに見たように慧皎が「高僧」の名をとって、「名僧」の名を非とし、あるいは王曼穎の書に「その唱公の纂集、最も実にして之に近きも、その鄙意を求むるに、更に煩冗なるを恨む」(大正蔵50・422c)とあることから知られるように、慧皎が『名僧伝』に対してすこぶる厳しい態度を取っていたとはいえ、やはり本書の成立には『名僧伝』が最も大きな影響を与えていたことはここに明記されて然るべきなのである。

本書はおおよそ以上のような背景の下に成立したと考えられ、その内容において、唐の道宣(596-667)が「呉越を緝哀して魏燕を叙略す」(『唐高僧伝』序、大

(4) 『高僧伝』の注釈的研究 (平井)

正蔵50・425a)と評するように北地の事情に疎いという欠点はあるにせよ、いったん本書が成立するや、後に著される各種僧伝は本書の体裁をおおむね踏襲することとなったのである。すなわち、道宣の『唐高僧伝』、賛寧(919-1001)の『宋高僧伝』などは十門分科の分類を含めて、すべて本書に倣って編纂されたものであり、まさに本書は後の僧伝の祖型となったといえることができるのである。他に本書ならびに著者の慧皎については記すべきことも多いが、紙幅の関係もあり、ここでは諸先学の研究成果によって、極くおおまかな『高僧伝』に対する概観を記述するにとどめたい。

(二) 研究の経緯

さて、次に筆者が本研究に手を染めることとなった経緯について一言しておきたい。私事にわたって恐縮であるが、筆者は昭和51年度駒沢大学公費在外研究員として、1976年4月から約1年間、カナダ、ブリッティッシュ・コロンビア大学(University of British Columbia, 以下U B Cと略称)を中心とした北米の大学をはじめ、ヨーロッパ・インドの仏教研究機関を歴訪する機会に恵まれた。筆者が主としてU B Cをその研修先を選んだのは、その折の「在外研修報告」⁹⁾にも記したように、U B Cには筆者と比較的専門領域を近くする仏教学者が三人もいたからであった。その三人とは、すなわち文学部宗教学科のレオン・ハーヴィッツ(Leon Hurvitz)、アーサー・リンク(Arthur Link)、そして飯田昭太郎の三教授である。三教授の詳しい紹介は当該研修報告に譲るが、思えばもう15年ほど前のことになる筆者の在外研修が、本研究に着手する奇しき因縁となったのである。

U B C滞在中、筆者は上記三教授に個人的にも研究の面でも親しく面倒を見ていただいたが、その頃リンク教授はすでに『高僧伝』全巻の英訳の草稿をほぼ完成しておられた。著者は幸いにも教授が手ずからタイプされたオリジナルの原稿の一部を拝覧する機会を得たが、その研究は原典に忠実な厳密なもので、その原稿に接したときの印象はいまにして鮮明に思い起こすことができる。そして、その一日も早い完成と公刊を期待していたのは、おそらく筆者一人ばかりではなからうと思う。しかし、教授が全力を傾けられたこの大部の研究も、1981年教授が不慮の死によってこの世を去られたため、ついに教授自身の手によってこれが公刊される機会は永遠に失われることとなってしまったのである。こうしてしばらくの

歳月が流れたが、かつて『高僧伝』を機縁としてリンク教授さらにはUBCと関係をもたれたという飯田昭太郎教授が¹⁰⁾、リンク教授の遺志を果たすべくその遺稿の整理に着手されたのである。ところが、実際にリンク教授の残された原稿を仔細に点検してみると、同教授の原稿には『高僧伝』本文の英訳に対する脚注 (foot note) が欠落していることが判明し、このままではせっかくの英訳も十全な形で公刊することができないことが明らかになったという。そのような折の1984年5月、筆者は新渡戸(稲造)・大平(正芳)記念国際日本学会に招聘されて再びUBCを訪れる機会を得たが、その際飯田教授より前の『高僧伝』英訳脚注の件のご相談を受けたのであった。しかし、このときは滞在期間が短かったこともあって、それ以上具体的に話が進展することはなかった。ところが、1986年11月本学とUBCとの間で姉妹校提携の協定が結ばれるにいたり、これを契機に筆者と飯田教授との間で『高僧伝』共同研究の話がにわかに具体化したのである。そして、おおよそ以下のような手順で共同研究を行うことで基本的に合意したのであった。

- ①リンク教授の英訳を参考にしながら、筆者なりに改めて独自に『高僧伝』の注釈的研究を遂行する。
- ②筆者の作成した原稿を飯田教授に送付し、特にその脚注部分を適宜取捨選択、加筆補正していただく。
- ③上記①②の過程を経た脚注の最終原稿の英訳は、現在UBCの名誉教授であるハーヴィッツ先生が担当する。

以上だいふ私事にわたったが、本研究の最初にあたり一言、研究着手にいたるまでの経緯を記し、あわせて本研究の目的を披瀝した次第である。なお、本研究は大西龍峯氏(本学非常勤講師)、粟谷良道氏(曹洞宗宗学研究所所員)、務台孝尚氏(同)、奥野光賢氏(本学大学院博士課程修了)をはじめ、現在、筆者の研究指導を受講している大学院生(博士後期課程)数名の助力を得てなされたものである。我々はこれまでに全14巻中、巻2までの原稿化を終え、現在巻3の会読を継続中である。今回はすでに原稿化を終えた部分の中から、与えられた紙幅の関係上、巻1冒頭の「撰摩騰伝」のみに限って公にすることとした。しかし、何分にも我々の研究はまだその緒についたばかりであり、本稿には多くの不備があると思う。したがって、今後の我々の長きにわたる研究のために是非とも大方の忌憚ないご批判とご教示をお願いするものである。

なお、本研究は3巻乃至4巻ごとに研究の完了次第、逐次アメリカ・カリフォ

(6)

『高僧伝』の注釈的研究 (平井)

ルニャ大学パークレー校出版局より刊行する手筈になっているが、平成元年度に「駒沢大学特別研究助成(共同研究)」を受けているので、その研究成果の一部としてここに報告するものである。

注

- 1) 『梁高僧伝』の名で呼ばれることもあるが、これは後に成立する各種僧伝史料と区別するために用いられた呼称で正式な名称ではない。なお、本書に対する従来の研究としては、以下のようなものがある。

山内晋卿「高僧伝の研究」(『支那仏教史之研究』, 仏教大学出版部, 1918.12)

常盤大定「梁高僧伝解題」(『国訳一切経』「史伝部」7, 大東出版社, 1936.10)

陳垣『中国仏教史籍概論』(北京科学出版社, 1955.12)

村上嘉実「高僧伝の神異について」(『東方宗教』第17号, 1961.11)

牧田諦亮「高僧伝の成立」(『東方学報』第44, 48号, 1971.3, 1975.12, 『中国仏教史研究』第3, 大東出版社, 1989.10に再録。以下、当論文の引用頁数は後者の頁数による)

牧田諦亮編『梁高僧伝索引』(平楽寺書店, 1972.3)

森野繁雄編『高僧伝語彙索引』(1979.7, 非売品)

林伝芳「高僧伝」(『中国仏教史籍要説』上巻, 永田文昌堂, 1979.10)

里道德雄「南朝三僧伝の研究(一)」(『東洋学研究』第20号, 1985.3)

他に本書の漢語資料としての性格を論じたものとして、森野繁雄「六朝漢語の研究—「高僧伝」について—」(『広島大学文学部紀要』第38号, 1978.12)がある。

また、本書の翻訳としては、前掲『国訳一切経』に収められた常盤大定博士による全文訓読の他に、古田和弘、金岡照光、中嶋隆蔵氏に次の抄訳がある。

古田和弘「高僧伝—神異篇」(『中国古典文学大系』60, 平凡社, 1975.2)

金岡照光「高僧伝」(『中国の古典』10, 学習研究社, 1983.9)

中嶋隆蔵『高僧伝—仏陀とともに—』(講談社, 1989.1)

また、欧文の研究としては、Arthur F. WRIGHT “BIOGRAPHY AND HAGIOGRAPHY HUI-CHIAO'S LIVES OF EMINENT MONKS” (SILVER JUBILEE VOLUME OF THE ZINBUN-KAGAKU-KENKYUSYO KYOTO UNIVERSITY, 1954)があり、1968年にはベルギー、ルーヴェン大学のロベール・シ(史接雲)教授によって、本書巻3までのフランス語訳がなされている(Robert SHIH, *Biographies des moines éminents (Kao seng tchouan) de Houei-kiao*, traduites et annotées. Première partie: Biographies des premiers traducteurs. Université de Louvain, Bibliothèque du Muséon, Vol. 54. Louvain, Institut

orientaliste, 1968)。なお、同書に対しては、数編の書評が著されているが、いまはその代表的なものとして福井文雅博士の「書評・『梁高僧伝』巻Ⅰ～Ⅲ フランス語訳註」(『フィロソフィア』第70号, 1982)のみを指摘しておく。他の海外の研究については、福井博士の書評に詳しい。

- 2) 天監18年が本書の撰述年時を意味するものではなく、本書に収録された内容の下限であることは、前掲山内論文でつとに指摘されている。なお、本書の撰述年時については、前掲山内、牧田論文で推定が試みられているので参照されたい。
- 3) 現代の感覚からすると自序が巻末にあることにはいささか奇異の感をおぼえる。このような事情を反映したものか否かは定かではないが、明本では自序を含めた巻14が巻頭に移されている。なお、前掲山内論文では、本書のように自序が巻末にある体裁は古くからのならわしであったと指摘している(40頁参照)。
- 4) 但し、「高僧伝」という名称が慧皎の創唱によるものでないことについては、前掲山内論文29頁、牧田論文38頁を参照のこと。
- 5) この言葉の直接の典拠は、『莊子』「逍遙遊篇」に「而我猶代子，吾將為名乎，名者実之賚也」とある。
- 6) 前掲山内、牧田論文等を参照。
- 7) 大正蔵50・418b-cを参照。
- 8) 前掲牧田論文15-17頁参照。
- 9) 拙稿「〈在外研修報告〉新北米大学事情—U・B・Cとアメリカの大学」(『駒沢大学仏教学部論集』第8号, 1977.10)
- 10) 飯田昭太郎「私の北米仏教学三十年—困みを破って生きる」(『駒沢大学仏教学部論集』第20号, 1989.10, 特に550-549頁を参照)

凡 例

1. 本研究は梁、慧皎撰『高僧伝』巻1「摂摩騰伝」の注釈的研究である。
2. 最初に『高僧伝』原文、次にリンク教授の英訳、そして筆者の和訳を提示した上で、必要と思われる語句に注記を施した。なお、筆者の提示した和訳は、今回、筆者があらたに原文から訳出したもので、リンク教授の英訳からの和訳ではない。
3. 本研究で用いた原文は、大正蔵経50巻「史伝部」所収の『高僧伝』を底本とし、大正蔵経脚注に記される校勘記を適宜参照した。
4. 原文の分節は便宜的にリンク教授の英訳のそれを踏襲した。
5. 注記として採録した語句は、便宜的に原文から採録し、注記番号は原文に付した。
6. 注記において引用した各種文献の中、特に必要と思われるものについては、引用原文を示した後、〔 〕中において筆者の和訳を提示して読者の理解に資した。

【撰摩騰】¹⁾

本中天竺²⁾人。善風儀³⁾。解大小乘經。常遊化⁴⁾為任。

昔經往天竺附庸小国。講金光明經⁵⁾。會敵国侵境。騰惟曰。經云⁶⁾。能説此經法。為地神所護。使所居安樂。今鋒鏑方始。曾是為益乎。乃誓以忘身。躬往和勸。遂二国交歛。由是顯達。

(1.) She-mo-t'eng [?Kāśyapa Mātāṅga], was by origin a man from Central India. Excellent in deportment and bearing, he understood [and could explain] both the *Mahāyāna* and *Hinayāna sūtras*. He always deemed it his responsibility to travel about converting [people].

(2.) Formerly he had gone to certain petty states which were tributary to India, where he had expounded the *Suvarṇaprabhāsa-uttamarāja-sūtra* (*Chin kuang-ming ching*, T. 663; cf. also 664, 665). When at the time an enemy state invaded that realm, Mātāṅga merely said, "It is stated in the *sūtra*, 'He who is able to preach this *Dharma* will be guarded by the deities of the land, and they will make the place where he dwells peaceful and happy.' As of now lances and javelins are being raised up for battle. When has this even been of benefit?" He then made a vow (*praṇidhāna*) to sacrifice his life [if necessary] and went in person and exhorted them to come to an accord. Consequently the two states did agree to a friendly exchange, with the result that his renown spread afar.

〔訳〕

撰摩騰。もとは中インドの人である。人柄は立派で、大乘と小乗の經に通じ、常に諸国に教えを広めることを務めとした。かつてインドに附属する小国に赴き、『金光明經』を講じた際、たまたま敵国が侵入してきた。ときに騰は心に次のように思った。

「金光明經には、この經典の教えを説けば、地神が護ってくれ、居住の地も安んじてくれる、とある。いままさに戦闘が始まろうとしている。かえってこれを利益に転じよう」。

そこで身命も顧みざることを誓い、自ら戦地に行き、講和を勧めた。とうとう両国はよしみを結ぶことになり、騰もこれによって名をあげた。

漢永平中⁷⁾。明皇帝夜夢⁸⁾ 金人⁹⁾ 飛空¹⁰⁾ 而至。乃大集群臣。以占所夢。通人¹¹⁾ 傅毅¹²⁾ 奉答。臣聞西域有神¹³⁾。其名曰佛。陛下所夢將必是乎。帝以為然。即遣郎中蔡愔¹⁴⁾ 博士弟子秦景等¹⁵⁾。使往天竺尋訪佛法。愔等於彼。遇見摩騰。乃要還漢地。騰誓志弘通。不憚疲苦。冒涉流沙¹⁶⁾。至乎雒邑¹⁷⁾。

(3.) During the *Yung-p'ing* reign period of the Han (58-76 A. D.) Emperor Ming dreamed that a golden man flew up to him through the air. He then brought together his congregation of ministers at a great assembly in order that they might divine what he had dreamed. A man of perspicacity, Fu I reverently submitted the following reply, "Your minister has heard that in the Western Regions there is a divine being whose name is Buddha. Might not he, indeed, be the one of whom Your Majesty dreamed?" The emperor considered this to be so and immediately sent the *Lang-chung* Ts'ai Yin the *Poshih ti-tzu* Ch'in Ching, and others on an embassy to India to seek out and make enquiry about this doctrine of the Buddha (*Buddha-dharma*). There [Ts'ai] Yin, and the others, met with Kāśyapa Mātāṅga, who then wished to return with them to China. Mātāṅga vowed his intent to aggrandize and spread (the Buddhist Law). Not dreading fatigue or hardship, he braved crossing the (desert of) the Shifting Sands.

漢の永平年間、明帝はある夜、金色の人が空を飛んでやってくるのを夢見た。そこで、大いに群臣を集め、夢見た事柄について問いただすと、博識の傅毅が申し上げた、

「私が聞きますところでは、西域にその名を仏という神がいるそうであります。陛下が夢にご覧になったものはおそらくそれに違いありません」。

明帝はなるほどと思い、郎中の蔡愔や博士弟子の秦景らを派遣し、インドにいて仏教を求めさせることとした。蔡愔らはインドにおいて、摩騰にめぐり会い、

(10)

『高僧伝』の注釈的研究 (平井)

彼を迎えて帰途についた。摩騰は心に仏法の弘通を誓い、艱難をものともせず、流沙をしのいでわたり、洛邑にたどり着いた。

明帝甚加賞接。於城西門外。立精舎¹⁸⁾以処之。漢地有沙門¹⁹⁾之始也。但大法初傳。未有帰信。故蘊其深解。無所宣述。後少時卒於雒陽。

When he came to the city of Luoh (i.e. Luoh-yang), Emperor Ming greatly bestowed esteem on him and the (privilege of) being in his company. Outside Westgate of the city walls he erected a monastery (*vihāra*) for him to live in. This is the beginning of our having mendicant monks (*śramāṇa*) in the land of China. However, the Great Law in this first period of transmission had as yet none who yielded it their trust. For this reason (Mātaṅga) concealed his deep understanding and there was no means by which he could manifest and (publically) make it known. After a short time, he died in Luoh-yang.

〔訳〕

明帝は深くねぎらいの情を示し、城(まち)の西門の郊外に、精舎を建ててすまわせた。これが漢の地(中国)における最初の沙門である。もっとも仏教は伝来したばかりで、まだ帰依するものもいなかったから、騰はその深い知識を蓄えたまま、講義や著述の機会を得ることがなかった。のち、しばらくして洛陽にて逝去した。

有記云²⁰⁾。騰訳四十二章経一卷。初緘在²¹⁾蘭臺石室²²⁾第十四間中。

騰所住処。今雒陽城西雍門外。白馬寺是也²³⁾。

相伝云²⁴⁾。外国国王。嘗毀破諸寺。唯招提寺²⁵⁾未及毀壞。夜有一白馬。繞塔悲鳴。即以啓王。王即停壞諸寺。因改招提。以為白馬。故諸寺立名。多取則焉。

There is a Record which says:

Mātaṅga translated the *Sūtra in Forty-two Sections* (*Syh-shyr-ell jang jing*) in one scroll. At first it was sealed up within the fourteenth partition of the stone chamber of Orchid Estrade (*Lan-tair*). This is the present White Horse Temple (*Bair-maa syh*) outside

the Gate of Western Harmony (*Iong-men*) in the city of Luohyang.

A tradition has it that a certain foreign king of a state was once demolishing and destroying all the monasteries; only the Four Quarter (*Catur-diśa*) Monastery had not yet come to be razed. One night a white horse circled the *stūpa* mournfully neighing. As soon as the king was informed of this, he immediately stopped razing the monasteries. Because (of this incident) they changed the name Four Quarters to White Horse. For this reason several monasteries in establishing names have in many cases adopted this one as their model.

〔訳〕

ある記録によると、摩騰は『四十二章経』一卷を訳したが、初めこの経は蘭臺石室の第十四室の中に封印されていた、という。

なお、騰が居住していたのは、現在、洛陽の西、雍門の郊外にある白馬寺がそれである、とされる。

また次のような伝承もある。外国の国王が、かつて諸寺院を破壊したとき、ただ一つ招提寺のみいまだ難が及ばなかった。ある夜、一頭の白馬が現れ、塔をめぐりながら悲鳴した。このことを王に伝え、王は即座に寺院の破壊を中止させた。その縁によって招提の名を改め、白馬とした。以降、諸寺院は寺名を決めるに際し、しばしばこれ手本とした、というのである。

【注】

- 1) 撰摩騰……生没年不詳。「四十二章経序」では、竺摩騰とある。次に取り上げられる竺法蘭とともに、伝説的色彩の濃い人物で、その実在については疑問視されている。しかしながら、本書に先行する梁・宝唱の『名僧伝』でも撰摩騰と竺法蘭をもって筆を起こしており、少なくとも当時の仏教徒の間では、この二人が中国への最初の渡来僧として認められていたようである。なお、彼らの行実として伝えられることは、後漢明帝の感夢求法説話や、最初の仏教寺院とされる白馬寺や、最初の翻訳經典とされる『四十二章経』というように、いずれも仏教の中国初伝にまつわる事柄である。したがって関連する研究も、初伝を述べた各種史料の批判を始めとして、これまでに数多く発表され、さまざまな角度から論じられてきている。その概要は、以下の書によっ

て知ることができよう。

塚本善隆『中国仏教通史』第1巻44-77頁

鎌田茂雄『中国仏教史』第1巻77-139頁

湯用彤『漢魏兩晋南北朝仏教史』第2章

任繼愈『中国仏教史』第1巻91-105頁

- 2) 中天竺……インドを指す訳語は、『史記』の「身毒」以来少なくないが、六朝期に最も多く用いられ、人口に膾炙したのは「天竺」であった。なお、唐代になって玄奘が「印度」を正音にしたがう訳語と称し、以後はこれが主に襲用されることになった。
- 3) 善風儀……風儀は、ものごし、態度、身のこなしのこと。『梁書』巻44、太宗十一王伝に「美風儀、眉目如画」〔身のこなしは美しく、顔立ちは絵に描いたようである〕とある。なお『世説新語』に「容止篇」の一篇があるように、六朝の貴族社会では、礼にかなったふるまい、上品なものごし、威厳のある態度、更には容貌の美などが尊重され、人物鑑定の重要な指針となっていた。
- 4) 遊化……本書巻1曇摩耶舎伝に、「沙門當觀方弘化。曠濟爲懷。何守小節獨善而已」〔沙門よ、あなたは諸国を遊歴して教えを弘め、衆生済度することこそ志すべきである。どうして我が身の救済といった少事にのみとらわれるのか〕(T50. 329b)とあり、遊化は、ここに現れる「觀方弘化」の語と同義で、広く諸国を遊歴して法を伝えることをいう。特に小節獨善の自利行と対置して、大乘利他行を指示している。
- 5) 講金光明經……中国来朝以前の摂摩騰の活動を伝える挿話が述べられているが、他にこの挿話を取り上げた文献は見あたらない。おそらく『名僧伝』に記載されていたものであろうか。『金光明經』を護国經典として挙揚する中国最初の説話でもある。
- 6) 經云……『金光明經』からの引用ということであるが、慧皎以前の漢訳には曇無讖訳(412-421の間に翻訳)が現存するものの、文字通りに該当する句はない。なお經典には、「四天王品」で四天王が国土を護り、争いをなくし、安穩豊樂ならしめることを説き、「堅牢地神品」で地神 *Dr̥dhāpṛthvidevatā* が經を説く場所に行き地味を富ましめ、一切の有情は豊樂裕福で、一切の苦惱の滅することを説いている。おそらくは両品の取意であろう。
- 7) 漢永平中……本書14巻の序録には「漢明帝の永平十年に始まり、梁の天監十八年に至る凡そ四百五十三載」(T50・418c)とあるから、慧皎は、摩騰の来朝を永平十年(67)とし、明帝の感夢はそれより数年前と考えたようである。
- 8) 明皇帝夜夢……明皇帝は、後漢の明帝で、明君の誉れがあり、在位は57-75。以下、中国仏教史上に著名な感夢求法説話が述べられている。この説話に言及する文献は、「牟子理惑論」「四十二章經序」「老子化胡經」、東晋・袁宏『後漢記』、宋・宗炳「明仏論」、范曄『後漢書』、南齐・王琰『冥祥記』、梁・陶弘景『真誥』、北魏・酈道元『水經注』、楊衒之『洛陽伽藍記』、『魏書』釈老志、「漢法本内伝」など、六朝期に限

っても少なくない。

なお、これに似た話として、後漢の桓帝が老子を夢みて、苦県に廟を建て祭ったということが伝えられている(辺韶「老子銘」)。また明帝の時代に仏教が伝来していたことは、『後漢書』に明帝の異母弟である楚王英が黄老とともに仏を祭ったという記載があって知られる。

- 9) 金人……仏像を図画鑄刻する際に、仏の特相の一として身体金色という点がある。中国では、後漢の末に笮融(?-195)が銅をもって仏像を造り塗金したことが伝えられており(『三国志』巻49)、魏の張晏は『漢書』の注に「仏とは金人を祠るなり」と述べている。
- 10) 飛空……仏典に六神通の説があるが、その一つは神足通で、飛行のことである。
- 11) 通人……家法、師法の厳格な制約下に、ただ一經を専攻する漢帝国公認の学問である今文学に対し、後漢桓帝の頃より、家法や私法にこだわらず五經を兼習する古文学が支持されるようになった。こうした五經に兼ね通じた学者を「通儒」と称したが、六朝知識人の理想は、更にこの「通儒」を超えて、經学以外のさまざまな事象に通じた人間、すなわち「通人」を目指すようになった。この点に関する指摘は、任繼愈主編『中国仏教史』第1巻(1981)114頁、及び吉川忠夫『六朝精神史研究』(1984)7-8頁に見られる。なお、今文学と古文学という漢代の学問に関する展望は、狩野直喜『両漢學術考』(1964)132-135頁を参照されたい。
- 12) 傳毅……『後漢書』巻80の文苑伝の中に傳毅の伝があって、「少(わか)くして博学」という。また文苑伝に列せられたことでも明らかなように、文章家として盛名を馳せたひとである。もっとも永平年間には「平陵に於て章句を習い」、章帝の建初年間(76-84)に、はじめて召されて出仕したので、本書の記事には既にして誤謬があるという指摘もなされている。陳垣「関于四十二章經考」(『陳垣學術論文集』第1集・中華書局)参照。
- 13) 西域有神……仏を西域(すなわち外国)の神とすることは、しばしば排仏論者が取り上げた論点で、外国の神であるが故に中国の習俗に適合しないとされた。この点については、吉川忠夫「中土辺土の論争」(『六朝精神史研究』1984, 462-489頁)を参照されたい。
- 14) 郎中蔡愔……郎中は宮中宿衛の儀礼的武官で、定員もなく職務も煩雑でない。地方官の推薦によって登用される孝廉や良家の子弟などが最初に得る官職である。蔡愔については、伝不詳。
- 15) 博士弟子秦景……博士は大学で五經を講述する官で、博士弟子は、大学の諸生として博士の下で教授を受け、射策(問難)の試験の成績によって郎中などの官を授けられる。一般の門生と区別して特に学業の進んだ者を弟子と称する。秦景については、伝不詳。

(14) 『高僧伝』の注釈的研究 (平井)

- 16) 流沙……中国西北方にある横断八百余里に及ぶ大沙漠。細沙が水のように移動するので流沙の名がある。
- 17) 雒邑……西周の初め、周公召公の経営した王城の地である洛邑を指し、後漢の都であった洛陽とは、やや位置が異なる。すなわち洛陽は、現在の洛陽市街の東北二十里に当たるが、洛邑は西五里の位置にあった。なお、後漢の際、五行思想の上から漢は火徳で、水を忌むということで、「洛」の字の水を去って「雒」とした。宮川尚志『六朝史研究・政治社会篇』(1964) 第8章第4節「洛陽」参照。
- 18) 精舎……『後漢書』党錮・劉淑伝及び檀敷伝等の用例からすると、もともと儒者が隠遁して官に就かず、私的に門生を集めて、学問を教授した場所を言い、後に仏教に転用されたようである。宮川尚志『六朝史研究・宗教篇』(1964) 81頁参照。
- 19) 沙門……馮承鈞『歴代求法翻經録』には、亀茲語 samane の対音という。『魏略』西戎伝には「桑門」「晨門」と訳している。梵語 śramaṇa の対音は、舎羅磨拏。
- 20) 有記云……『出三蔵記集』巻2に、「四十二章経一卷。旧録に孝明皇帝四十二章という。安法師の撰ぶ所の録に此の経を闕く。右一部凡(すべ)て一卷。漢の孝明帝、夢に金人を見、詔して使者張騫・羽林中郎将秦景を遣(つかわ)し、西域に到らしむ。始め月支国に於て沙門竺摩騰に遇い、此の経を訳し写し、洛陽に還る。蘭臺石室第十四間中に蔵在す。其の経、今世に伝わる」(T55・5c)とみえる。
- 21) 初緘在……長く秘庫に埋もれて、世に行われなかったというのであろう。安世高の『大十二門経』なども「篋匱に緘在し」、二百年の間知られずに過ぎたといわれ(『出三蔵記集』T55・46b)、せつかく翻訳されても長く日の目を見ない経典もあったようである。なお「在」を「緘在」のように場所を指示する接尾辞として用いることは、六朝期の口語の語法である。森野繁雄「六朝訳経の語法と語彙」(『東洋学術研究』22-2, 1983)参照。
- 22) 蘭臺石室……漢代、宮中の図書秘籍を収蔵していた場所。『後漢書』巻66王允伝に、「及董卓遷都関中。允悉収斂蘭臺石室図書秘緯要者以従」[董卓が都を関中に移すことにしたので、王允は蘭臺の石室に収蔵された図書、秘籍、緯書の重要なものをすべて収めとって、董卓に随従した]とある。なお、後漢より、御史府を置いたので蘭臺寺とも称された。この場合の「寺」は役所の意であるが、宝唱はこれを仏教寺院と勘違いしたのか、『名僧伝』では、摂摩騰と竺法蘭を蘭臺寺沙門としている。
- 23) 雒陽城西雍門外白馬寺是也……『洛陽伽藍記』巻1に洛陽城の西面に四門あって、南から第二の門について「漢に雍門と曰う。魏晋に西明門と曰う。高祖改めて西陽門と為す」とあり、また同書巻3に白馬寺について、「漢の明帝の立つる所なり。仏教. 中国に入るの始めなり。寺は西陽門外三里の御道の南に在り」という。
- 24) 相伝云……中国における最初の仏教寺院が白馬寺とされた由縁が述べられているわけだが、漢明求法説話を収載した他の文献では、多く明帝派遣の使者が仏経を白馬に載

せてきたことをもって、その名の起こりとしている。一方、ここに慧皎が採用した白馬寺縁起は、『法苑珠林』巻39（T53・594c）では、晋の元帝が太興2年に（319）、建康に建立した白馬寺の名の起こりとして説かれている。

- 25) 招提寺……『唐高僧伝』巻2, 達摩笈多伝に「正音は招闍提奢と云う。ここに四方と云う。謂わく処所, 四方の衆僧の依りて住するところと為すなり」(T50・435a) とある。招闍提奢は、梵語 *caturdiśya* の音訳。

（平成元年度，駒沢大学特別研究助成〈共同研究，研究代表平井俊榮〉による研究成果の一部）